式辞

春の訪れが日増しに感じられ、梅の花も紅白に咲き誇る春の佳き日に、教育委員様をはじめとするご来賓のご臨席を賜り、ここに第三十五回卒業証書授与式を挙行できますことに対し、心から感謝申し上げます。

ただ今、卒業証書を授与しました二百七十七名の卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。私たち教職員一同、皆さんの輝かしい門出を心からお祝いいたします。そして、七月に亡くなった河田先生も、皆さんの晴れの日を同じように喜んでくれていると思います。

さて、卒業に際し、私から一つのメッセージを贈ります。それは、高村光太郎の有名な詩『道程』の書き出しです。

「僕の前に道はない
　僕の後ろに道は出来る・・・」

皆さんが高校三年生まで歩んできた足跡を振り返ってみるといろいろなことがよみがえってくることと思います。もちろん歩んできた道は一人一人違っています。太い道、細い道、踏み固められた道、でこぼこの道・・・形は様々かもしれません。しかし十八年間歩んできた自分の道です。自分の歩んできた道に責任を持つと同時に自信を持ってください。そしてみんなが歩んできた道には多くの人が関わってくれたことを忘れてはなりません。父母、家族、先生、友達、先輩後輩など、あなたを周りで支えてくれた方々がたくさんいます。卒業は人生の一つの区切りです。支えてくれた方に感謝の言葉をかけてください。また一方であなたも、意識していないにせよ誰かを支えていたと思います。お互いがお互いを支え合って生活し、成長してきたのです。

卒業というと、卒業証書、卒業アルバムなど、今までの高校での勉強や生活にばかりに思いをはせてしまいがちです。『道程』の詩でいえば、「僕の後ろの道」です。卒業は一つの区切りではありますが、終わりではありません。これからが新たな出発です。アメリカでは、大学の卒業式を、Commencementというそうです。これは「新たな始まり」を意味します。卒業してからが本当の人生の始まりということなのでしょう。卒業式は、たいへんな勉強を乗り切って卒業までこぎつけたことを称えるだけでなく、新たな門出を祝福する場でもあるのです。ですから、卒業式はアメリカ流に言えば出発式です。後ろを振り返るのではなく、前を見ることを意識する式なのです。

卒業生の皆さん、今、皆さんの前には何が見えていますか。『道程』で言えば「前に道はない」のです。出来上がっている道はありません。これからは、皆さ

んがつくっていくのです。今まで以上に自分の力で。これから進んでいくであろう道は、多くが上り坂で曲がりくねっていて、時々道が分かれていることと思います。その時、皆さんはどうしますか。たとえ道が曲がっていてその先が見えないとしても「きっといいことがある」と希望を持って進んでいってください。希望は「生きていくための勇気」だと私は思っています。悲観的に考えても道を進むことはできません。少しぐらいの困難はこれから次々に出てきます。その一つ一つの困難を乗り越えることで、少しずつ自信がつき勇気がわいてきます。

先ほど、私は「今まで以上に自分の力で自分の道をつくっていくのです」と言いましたが、何でも一人で頑張れというわけではありません。必要なときには周りの人の力を借りてください。社会は一人きりで生活することもできませんし、仕事も一人きりではできません。ある時は誰かに支えられ、またあるときは誰かを支える関係なのです。

『道程』でも、最初の二行に続けて、「ああ、自然よ／父よ／僕を一人立ちにさせた広大な父よ／僕から目を離さないで守る事をせよ／常に父の気魄を僕に充たせよ／この遠い道程のため／この遠い道程のため」と、広大な自然を父に見立てて、自分を見守り励ましてほしいと願っています。また、父を自分の実際の父と捉え、人生の先人としての父を、自分の見守り役として知恵や思いを自分に伝えてほしいと願っていると考えることもできます。

卒業し一人立ちしていくみなさん、あなた方はこれからも多くの方々に見守られながら成長していくのです。後ろにできる道はこれからどんどん長くなります。その足跡は、長くなれば長くなるほど自分の中の自信となっていくことと思います。これからも社会の中で様々なことを経験し、いつまでも希望を持ち続け前向きに努力できる人になっていくことを期待しています。

最後になりましたが、保護者の皆様には、これまで、本校の教育活動に対し、深いご理解とご支援を賜り、厚くお礼申し上げます。

それでは、希望に満ちた出発の日に当たり、卒業生の皆さんの前途に幸多からんことを心から祈念し、式辞といたします。

令和二年三月二日

群馬県立太田東高等学校長　北爪　徹